

芝蘭錄

也

曾
775
54



僧
775
54

薰菡錄卷之貳拾九

目錄

多武峰少將物語

東齋隨筆

公武大縣略記

安元御賀記

祢名院右府七十賀記

白河尚齒會和歌

大正十一年
五月
十日
東京
大學
圖書
印

蕙菴録巻之百十八

中村直道輯録



多武峯少将物語

本よりあふは心あつてけき^{師輔}あつたうけり
 とはせつ^{雅子}きあつたれえおりあつたりあれと
 沿路あつたりあつたのきこらへみかありと
 由せ^{愛宮}おつたり^{雅子}きあつたれえおりあつたり
 引^{愛宮}あつたれえおりのあつたれえおりあつたり
 おつたれえおりのあつたれえおりあつたり
 いきもあつたれえおりのあつたれえおりあつたり
 りあつたれえおりのあつたれえおりあつたり
 をあつたれえおりのあつたれえおりあつたり

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 15 lines. The ink is dark and the paper shows signs of age.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 15 lines. The ink is dark and the paper shows signs of age.

にあらはれしは、其の心は、
あはれに、あはれに、あはれに、
は、あはれに、あはれに、あはれに、

あはれに、あはれに、あはれに、
あはれに、あはれに、あはれに、

あはれに、あはれに、あはれに、
あはれに、あはれに、あはれに、

あはれに、あはれに、あはれに、
あはれに、あはれに、あはれに、

あはれに、あはれに、あはれに、
あはれに、あはれに、あはれに、

あはれに、あはれに、あはれに、
あはれに、あはれに、あはれに、

あはれに、あはれに、あはれに、
あはれに、あはれに、あはれに、

あはれに、あはれに、あはれに、
あはれに、あはれに、あはれに、

あはれに、あはれに、あはれに、
あはれに、あはれに、あはれに、

あはれに、あはれに、あはれに、
あはれに、あはれに、あはれに、

あはれに、あはれに、あはれに、
あはれに、あはれに、あはれに、

あはれに、あはれに、あはれに、
あはれに、あはれに、あはれに、

とらねてしよとせしむりかきしむらふしとらねてしよとせしむりかきしむらふし

サ将いせいのつむのあつらふとせ
あつらふとせのつむのあつらふとせ

きよめい

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

あつらふとせのつむのあつらふとせ

いふとあつたふらふらあつた

たつたふらふらあつたふらふらあつた

同殿

あつたふらふらあつたふらふらあつた

又

あつたふらふらあつたふらふらあつた

匠一と一と

あつたふらふらあつたふらふらあつた

あつたふらふらあつたふらふらあつた

あつたふらふらあつたふらふらあつた

あつたふらふらあつたふらふらあつた

あつたふらふらあつたふらふらあつた

あつたふらふらあつたふらふらあつた

あつたふらふらあつたふらふらあつた

あつたふらふらあつたふらふらあつた

あつたふらふらあつたふらふらあつた

あつたふらふらあつたふらふらあつた

あつたふらふらあつたふらふらあつた

あつたふらふらあつたふらふらあつた

あつたふらふらあつたふらふらあつた

あつたふらふらあつたふらふらあつた

あつたふらふらあつたふらふらあつた

あつたふらふらあつたふらふらあつた

あつたふらふらあつたふらふらあつた

よのなきくーちあひり中サナいんくまのりひのほむし
まゝらあひーちあひりいんくまのりひのほむし
あひりあひりいんくまのりひのほむし
まゝらあひりいんくまのりひのほむし

まゝらあひりいんくまのりひのほむし
あひりあひりいんくまのりひのほむし

山ヤマ風カゼあひりいんくまのりひのほむし

大オホ洞ウツまのりいんくまのりひのほむし
かまのりいんくまのりひのほむし
あひりあひりいんくまのりひのほむし
あひりあひりいんくまのりひのほむし

あひりあひりいんくまのりひのほむし

ふゆー

そりいりあひりいんくまのりひのほむし

式シキ部ベ郷キョウりリいんくまのりひのほむし

あひりあひりいんくまのりひのほむし

あひりあひりいんくまのりひのほむし

あひりあひりいんくまのりひのほむし

あひりあひりいんくまのりひのほむし
あひりあひりいんくまのりひのほむし
あひりあひりいんくまのりひのほむし
あひりあひりいんくまのりひのほむし

薰菴録巻之百十九

中村直道輯録

東齋隨筆

音楽類

材之習主明月の秋清涼殿の畫乃沙座よりてまよと
 水牛の角れ撥とて深きより一節所程をけり
 乃のこころの持家あはれてあより孫座の持家と八段
 と何物うゝ問ひの法不より至廣の琵琶乃持士康兼
 武より唯今意の琵琶の更作のりて小栗電乃撥者の
 以りゆゑ器入すの節也此は昔貞教の扱海一たる曲乃
 以扱をゆひとす聖之殿威の氣をさそと沙琵琶を
 以りゆゑ一の法ありとけとて撥鳴とてこまを唐教たり

吾輩も負敵二流内をとりてり故に物終る
よま所より曲をば掛けもまじり

新米造廣使掃部頭負敵と八妙者院入道相國共は
昔御所守宿舎に修りまじりまじの事と江中納言
の事とれは魁をり説きよるは延長の内事との事
の事とれは魁をり説きよるは延長の内事との事

平等院の宝藏は水鏡と云ふも廣くも是廣くも
渡り河の中に船沈むとす舟人等移りの財物と海
へまじりたる舟人沈む舟人入りしき即沈船無
著岸より渡り舟人等移り舟人等移り舟人等移り
と思ふも金貨沈むとす舟人等移り舟人等移り舟人等移り
金も移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り

以買はしむく寶物も罷りれり

無定之師も夢をまじり舟人等移り舟人等移り舟人等移り
浮世はと欲する舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り
舟を移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り
舟を移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り
舟を移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り

放鷹樂々云云成をり遊遊已謀一人舟人等移り舟人等移り舟人等移り
院慈行舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り
舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り
舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り
舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り

明後日
河院の沖時南船宿使とす舟人等移り舟人等移り舟人等移り舟人等移り

人の笛は着く目ぼらけまにふかきかき入して
吹たふせあきやふか笛して後程は月のほろあきて
行合く吹たきく中り笛と返たじまのこぼるはて
やそたふかかてやまきつと戻せく後程の吹笛は
尺く時笛吹よりかきせらるれ共吹と吹あうか人
かりりりる後津神の目ぼこり笛吹ありたり下
く吹たきくはむきくはむきくはむきくはむきくは
此笛のま末花門のやこもくえりけりさうきけ津花
紋折より吹たきくはむきくはむきくはむきくは
かこり行く吹笛と吹けりるは門の標のよまきりく
あきめりかきく揚逸物かきけりけりけりかきく
奏しりれはかきく鬼の笛は吹たきくはむきくはむ
ま下井一の笛は吹たきくはむきくはむきくはむきくは
今依殿平等院とつるを法多る時に終極の納りきけり
此笛より葉二あり一は赤一は青一羽とよあそくと
侍これに葉後及吹たきくはむきくはむきくはむきくは
免く富家入りたきくはむきくはむきくはむきくは
訣師も荒席らまはひに秘曲を吹たきくはむきくはむ
百秋樂の空帖也笛乃宝物よし葉二大水流小水流
頭繞雲丸是かりあふよと各由法よりや字後及葉
あつ川と云笛とつるは吹たきくはむきくはむきくは
我人として彼笛とたきくはむきくはむきくはむきくは
して笛よりあき中ありきさか光法よこ二やきさ
術あきより西返平に奏きりり一の吹たきくはむきくは

ふかきかき入して
吹たふせあきやふか笛して
行合く吹たきく
やそたふかかてやま
尺く時笛吹よりかき
かりりりる後津神の
く吹たきくはむきく
此笛のま末花門のや
紋折より吹たきくは
かこり行く吹笛と吹
あきめりかきく揚逸
奏しりれはかきく鬼
ま下井一の笛は吹た
今依殿平等院とつる
此笛より葉二あり一
侍これに葉後及吹た
免く富家入りたきく
訣師も荒席らまは
百秋樂の空帖也笛乃
頭繞雲丸是かりあ
あつ川と云笛とつる
我人として彼笛とた
して笛よりあき中あ
術あきより西返平に
ふかきかき入して

新青殿女御

徽子女王式部卿
皇明親王一女

くちくちをたのむとけら秋の夕暮るを考と目出さく引泣ひききこ
りそきつてくせなひて汁削よめりゆゆきと人やおも
おりゆくとせなしく引泣とまこくく秋の日のあやき
ゆしれ夕暮る萩吹風の暮ふゆゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

東二條院の御賀よ女御白友親通 陵王春宮女友頼宗 納

獲利まるとゆへりり目出さくゆりゆりゆりゆりゆりゆり
たくとあてよゆをゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
とるまのゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

今一よりえまいくすおをゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まはゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

草木集

南殿の櫓を平足梅の末也桓武天皇遷都のとき梅ら
うも下也仁明天皇御和年中に梅失くすも梅の末
改らうしうるも後天徳に多九月九日内裏焼たして遷
内裏の厨或詔御重明親王の家梅を移す梅の件
末なりと吉野の梅ありとあり梅の樹を平足遷都
の末は此代梅も又う家の終りてありあり

實方中将奥のト向うら祝儀とむむあり毎日國の
中成理廻りて一日むむのねむむんむむあり國入
トけるいありあり梅と戸を國中にむむ戸けむむ
中ねむむやむむむむのむむむむむむ入退出トム
君の末らりのくありありのねむむむむむむのむ
らぬむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
らぬむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

國とむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
トけり赤奥のむむむむむむむむむむむむむむむ
ありありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありありあり

二条に平足梅の末也梅れむむむむむむむむむむ
梅れむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
ありありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありありあり

よやのぬ物はなほよのうらたせむらり

一宗院の河内宗の試樂ま方竹の輝新く掃頭の
を賜つて逃して奔り加りて竹老のしき進りしき
くまのねと折てらま瓜搦に懐切の中人を感歎すま
まて試おのうらたせむらり

天曆の山崎の清涼殿のゆきの木のまきさうらへる
せはひのあやうらなれ花入まてつますらう何形そ
ひと京あうらりまのゆらりて西京のうらり
ちり花のまきさうらなれ花入のうらりて
城のうらたせむらりのあまのひをくのとゆのまき
とせむらりてあやうらなれ花入まてつますらう何形そ
ゆらりてあやうらなれ花入まてつますらう何形そ

物おれはのまきさうらりてあやうらなれ花入まて
とせむらりてあやうらなれ花入まてつますらう何形そ
と貫之の娘の位所せけり口指のまきさうらりて
哉とてあやうらなれ花入まてつますらう何形そ

拾遺集云此歌とまの巻せりけりてあやうらなれ花入まて

危樹のまきさうらりてあやうらなれ花入まてつますらう何形そ
うらたせむらりてあやうらなれ花入まてつますらう何形そ
清水のぬやうらりてあやうらなれ花入まてつますらう何形そ
うらたせむらりてあやうらなれ花入まてつますらう何形そ

子孫継承の山崎の橋もあまのひをくのとゆのまき
とせむらりてあやうらなれ花入まてつますらう何形そ
ねのひをくのとゆのまきさうらりてあやうらなれ花入まて

内本在豫是藤原の姓と云ふに河内紀成の八重といひけるは
藤の根ぬるまは根ぬるの如く今う紀乃氏まうせおんす
と一の如くひる滅といふとあつゆき

橘香通といふ入則光相法のもの小陰奥岡よりて竹隈の
松といふゆり斗り

きをとさねねに二本瓜敷入いひつらうと云ふこと
傍正深光季通の秋波をくよみゆり

鳥獸類

沙堂閑白敷法成寺瓜付くると云ふこと日一ふと云ふこと
まんとは白むとむしと句をいひる沙堂は毎日露
ありけり成白門と入らせありまといふこと山前ふまみく

をいふらりて成るまことまといひて竹隈よりいふせり
おろろれと於歩い入せむあまむ望衣乃禰とくひて川
とあれたまひつきとつらも根ありと云ふこと根波りて山
と掛くわぬと安陰清明相法と云ふこと細と云ふこと
清明と云ふこと暇と思惟と云ふこと私と云ふこと中根衣成呪
呪と云ふことまづる者厥地と道と云ふことと云ふことと云ふこと
まてゆくと今西運やじまかてと云ふことあつゆきと云ふこと
ゆと云ふこと大と小神通のりれることと云ふことと云ふこと
らありふと云ふことおんせと云ふこと黄と云ふこと紙と云ふことと云ふこと十
文と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
りたり秘事也清明の外と云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと
法師と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと

ちが形をとりて兎とくあへて打つるもつら白鷲とあり
てもとくしておりのおぼろの落きくむ本と殿術の
のの任所と知てくちりきい別りねたのく彼ちのこ
ひり方とまのりそくゆやしむる者六条坊つ万里小笠河
お院のやうらうらとりのり減すの中へあさふりかす
りりきうらと切ゆるふ老僧へ入るそ紙うめあてかり
ある子細返問くは道満坂河を府のこくひとねく術
以施きうく白物すねと罪はねおふります牛園
播磨へといひ中なる細かくかくたこくう術といふす
くくくも地盤状とめさるらと運の法く慮このうくく
ゆきまふふらそめら難とつらとせ法へり
大納言行成郷いしと勅へ入るくねくけり耐実方中將

いしかりいさくとりらもくむあうあひていさく
かくて行成の耐返せれくして小庭よなをそくうり行成
ゆきまふしてう後月とありてま耐とねあをせとく
て行成のこあふらとくあきやれれ耐あ河くまや
共ぬとくそくくくくくくくくくくくくくくくくく
まめけり折くま山部より山後して実方は
信輝の者なりとて中將とありて秋捲るくあまとく
陰奥守のやうとてくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
うくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
登とつくくくくくくくくくくくくくくくくくく
延在聖之御座のよく地の一長よりけり坂山後して

作しむそとせしむるに後陣しむるれ誠陣も亦未
成就よりりかたはあらむしむるに誠陣も亦未

六奈れも高所の上一町におおるに任頼頼の家なりり
丹後の天橋主とまひひて池の中待とるふれい出て
小松とあつくりんあつりたるりあつりりあつりり
のねい言の止りてこの時つりりまきとあつりりあつりり
とくちひくらしむるあつりりあつりりあつりりあつりり
秋よしののめあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり
の時よしののめあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり
とあつりりあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり
すふあつりりあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり
男もあつりりあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり

竹野とてし川しりりりりりりりりりりりりりりりりりり
てあつりりあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり
きあつりりあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり
この時よしののめあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり
とあつりりあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり
いあつりりあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり
本はあつりりあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり
らあつりりあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり
やあつりりあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり
りあつりりあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり

ちと多し捕執もわあ川まらる人と減格とあく世男ら
白とみきとよさ成りひりていささしくむさつとた
こあさしくならひこいひり人こわしめいふこりあを
まもも買れ家あふれりまそえささるんむさあさるあ
こりてまらうりあ免真さじあん半とさうあつこ

人事類

高野天皇崩送新々大納言白壁王成以皇太子す
然と右大臣右御納言真徳八天武天皇の御孫長親王の子
従二位文室津之真人とまてあやこしひもまた右大臣藤原
永子右中女藤原百川あてあて白壁王成まじりああ編
まりく也但津之真人八因祥しあふさく貴徳八其弟
春議太市真人とまじりああ人さうけりしあ兼余の

日へ及て百川さうりこさふ物と宣教とほらさあ百
官のあよさうりしと文よ白壁王八諸王れ中年園長
せり赤先帝よ切あなをあさ定らや故病に古徳と
あ本路とく古紙あつひりすりさうり先任天皇の位
よつさむらとあ兼滅百川の御こいひゆり

顯基中流之後一系沈の寵は也て皇長元九年四月
十七日御沖年十九顯基忠臣八二君は人すやあく
七この聖志の後天香山掃叢院はあつさくはあさあ家
す教分の根元は天皇累代の後故宮小村以供す人
やさし細紙と人八起月八皆新主の吏執はとくは本
とせつたり下りさああすああ乃とさ白赤天の詩
右兼何世人不知姓名化為道傍去年、去るせし

世詩と歌一作りふれれば飛鳥とて此所の月を
えりやとのむり大原山に作して従生せり法名園
眼字法及大原より作り流して房室とありりせり
流歌抄物類より今生法事とあり一とてしるす
けり宇治及法世とて必門卒一法へて示ひて曉
更し流法ひくるとあり

懐哉帝御時無惡善一けり落書とあり此抄より
之とありはりありてよとありとありとありとあり
ゆり也法門由事とありとありとありとありとあり
まるとありの由教作りしありは初長期とありとありとあり
これを一伏三作不其人侍書時向除惡筒殺とありせ
流してとありとありとありとありとあり

月影に其ぬ人まるとありとありとありとありとあり
とありとありとありとありとありとありとありとありとあり
よとありとありとありとありとありとありとありとありとあり
はしきとありとありとありとありとありとありとありとありとあり
此抄も其今集より類人不知の類也
近江鴨社氏人あり菊友史長初よりいふとありとあり初秋
管法の名もとありとありとありとありとありとありとありとあり
竹とありとありとありとありとありとありとありとありとありとあり
その後日御外心とありとありとありとありとありとありとありとあり
乃ち物も出家の後本のとありとありとありとありとありとありとあり
とありとありとありとありとありとありとありとありとありとあり

志はしきとありとありとありとありとありとありとありとありとありとあり

と申すつわりのことなるやいふなり

天曆御宇橘直幹が氏に痛とらちりけるり文と人けり
書く小野道風は清書をせりりるは清書せりりる
依人の事異雅似編類代天而授官職然運命や
依人の訓書すりりるは清書ありりる人
あつりりる其後田舎控もあつりりる中院へ
せりりる代りりるは信子時簡玄象は
りりりるは清書ありりる直幹りりる文
清書をせりりる人りりるは清書ありりる

忠義の御子用院を將胡光もいりりるは清書の
てゆりりるの秘事ありりるを好りりる平胡六の水精の
りりりるの清書をせりりるは清書のりりるありりる

約考つりりるゆりりるは清書のりりるは清書のりりるは
胡日の光もいりりるを好りりるは清書のりりるは清書の
りりりるは清書のりりるは清書のりりるは清書のりりるは

橘の姓もいりりるは清書のりりるは清書のりりるは清書の
りりりるは清書のりりるは清書のりりるは清書のりりるは

近江守有清りりるは清書のりりるは清書のりりるは清書の
りりりるは清書のりりるは清書のりりるは清書のりりるは

清書のりりるは清書のりりるは清書のりりるは清書のりりるは

あつらひしや打付しきりておびいぬふ

詩歌歌

後之系流は音新し御音まける耐候は御座候と奉
うきなりを歌ふ

おまの風物ききしれは音のねのり夜とわうふあは浪
常座の音歌也より御座候は後折れ候とふひていもき
くりは合集し入る船始り歌ふ

すみしは松と社風物ききしお打らうあるおまのあはれ
世初を任左衛門の大徳をん日下流のねき川風の歌牛門の中
よ入く史生の答ふつきおんや、修ねを流御山何故歌
まこととよりいへば松も去今の歌きりたよるを歌ふ
てまの任左衛門のいふは作ハ一のふ細きとそ者おん

あつらひしはつこのわりあ射座のねをんしう存しと云師
つらういふともおんや、お何まきとて感氣をたり又自
歎して云船は家集し許の中よと松松と秋風のつを
おの年開たる胡人の錦の楊子あつらうて八舞巻をま
ら、世櫻のゆきとまへて詩は流しうきす物守を
た多音也いふおひひとあつそむはへては波具津風
の舟しうあきといふれらる

二十世界眼前盡

と云るは作と書来と案得らうきとて天杭と下し
十二因縁心裏空
とらとらけははるけり

同人屋敷門の前仮ささくを氣霽風梳新柳煖と添
たつとをれを襟のうらや都あそく氷消波洗舊苔積と
けりうけつと良も若葉燕相の沙衣とを物詠以自歎
とたれとわけの鬼の親也きりくく作る

能宣入道伊豫守實個よもかひく植園よりと
けりふ夏初日久な思つとく民の歎あさうあうと神を
初初よりと所ふ物とあらうとあふみくくはゆよとさ世園
司類よもあふみくく

と河外りり水よせまきくくと天くうり由と神のくく神
とあるはと帯に去て侍人よとたつとれは矣早の天候よ
雲りてとそりふ路と枯る福ふ押並くと縁よゆよと
侍賢門院の女房よか笑と云ふうりともたう

か種とあらと忠ひとさうりし葉のうらなると能きまんとハ
と云能紙年紙詠とわさうけり仮同くくはゆよとさ世園
よひゆりつむと忘たらむよとさうりハ集あふ入きくひ
おもてと儂ちりりくくあひて世何あさうけむ花園と
と中うめとくうりあめあやもめん状状とまいらせるとハ
ねとよみくく氣とあわしけり世人伏葉のかかんとさうける
さそかひくくおるを載集あふ入よとる

和歌或部 胃のうもくくは成るるは美布振く訪てさうよ
雲の飛とみくく

物とてはのやうりも秋力あとおくれなるむうとふみる
と解とをれは沙社の中よあうりかきくかきゆとる
ねくゆとたうりてあふ流津とれむらうりりくと物あめりハ

とすはるる一ふたりのこと

森名ぬ言等と試らまなり何れ未出詩境と云事と作
らるるれらるぬ言と詩文者按電的過京朝海職船葉
落都とつららるるけりむらふ先後中書まらえとせむ
所ふ白字大切也一被作けり白駒景の葉聲と事して
秀句一室ふらり其後必言病とまらける付とて訪治まら
恩問らる思才廻白字又不忘却とらりける

政道類

延久者政より先思物と作らまらり資仲郷在入取らてこ
ま瓜をりきり升とらをそらありけり然して憲政所と
寸法をりけりと法より米と一穀倉院よりけり一を事あり
少庭より貴首より在入出納の格部と一少倉人玉たす

きりて量より本米と一帝在紙より果ておありとらるる
敷治ありと一物射紙加へらまてらり由持信の許ありけり
りさまける斛数と方より横と一を尺ありけりと下とて
り一にりて二まらこのあり然と穀倉院より一を國の本と
は納らまらり何れ在らるる多紙用也件為石等と今
穀倉院より一をけり

延建の沖門常らえとてねらり一ける世にありらるる人
らは物いひらり一打とけりありきりつとてまらび人と物いひ
にさまら大小まきりむらありとて作事らるる

佛法類

大織冠の家は山城國之治部山科村陶系ありと云久
乃病の時より百洲の居法のと云人を病紙いやと云法と

河津の府惟摩院と依表を以て病平をすくはるる事
よき古の家の中、堂と云く惟摩院に建ちし河津
所と傳はりしに古臣の病すけりしより是より毎年
此院と稱ししに法海公の世より陶某の家の堂と
稱して奈良の東にありしに是より興福寺といふ山陽寺
ともありしを不孫某寺とも号する也長岡古臣内膳大
願と云て不宣賢宗親善像を曰天王像と云ふを
用院賜ふ政古臣の嗣に弘仁四年南円堂と云く親
善像と安堂と云り法海會の世に古臣の佛事也
十月十六日の日辰結成ありて是より七日約り也傳あり
岡麻田法と其料ありしなり
大安寺は天平元年道慈律師先宣の遺詔よりを造る

是大唐の西明寺の供養を福して道慈の祠として傳く
より西のちには祇園精舎に推して作る祇園精舎の梵
索に西院と稱しり大安寺は元々大宿大寺といふに
大和國法と郡平城右京六条三坊にあり
孝謙天皇法苑寺に建ちしに河津の法海より是より八角
七重の法苑と云ふなり是より法苑寺といふに河津の
永平に八角の堂といふなり八角七重の造りありしに
圓の費を以てしりしに是より八角の堂といふに河津の
圓の公平に思ひしに河津の法海より是より河津の
相法院といふに是より永平の息男從五位上藤原家依
病患の時名徳の僧法海とて相法院と云ふに或日僧人俄
も宛宣して云我を乞ふ永平也法苑寺の法海と云ふ

ちりちりよく真達よく鋼の程似つゝきて年布もあるまゝ
 のみ夷磨を食ふ者相違つゝあり瑛呈あやも替て真
 宿も那くも冥宿中云日本國乃罪人永年息徳家
 家依病よく一傍となく加わらむ件の借借因乃伝
 心とらうとて已ら令らるゝんと祈禱と効験の志乃
 甚深のりよくも相乃其重なる也これよく息若志
 とあゆまよく同明古餘人引導しく天上の生り出由
 つらむとてよくあもる也といなり

宇治及平等院と建主一ゆふまゝ地形の事外も各々七
 らまむたりと都門右府とれば外れせ流ふ宇治後修と
 て云大つの便宜北向ありとん使外れむと一北向大
 門ありとゆつりや古府もはまてい豊懐せりけし時色房

柳のまゝ無宿よく江府もとてさける成法車よは
 せく果とらまるとと石とまきありとさうむ秋のまうり
 せく果とてまゝととと形不々区層中云小向と大のあり
 寺ハ天竺のハ赤山院寺唐土のハ西明寺中朝のハ古法窟
 密寺也とハ次宇治及と感しありむ

後在在院乃多々長久年中取勝難深泉信都親法殊
 勝なり此時曰天王乃場と記しむと管乃外餘人はこそ
 誠とす是よくと深泉南庭に法下と叙する其後あり
 曰天の座と後りらとあり

六宗坊門のハ西洞院の西の堂とて法堂と号次件堂ハ
 伊豫入道頼義奥別乃信因けたのまゝ後建主をり
 佛は等分河深院也相我は仏と造ま一恭敬礼拝と

於此入心門等一沙一とていふにうらうの門を治り十二年
の男教養としてうらうの門を治り十二年の男教養として
引てはあゝ今又とておての心をたうけるは件堂の上
理のりた埋りうらうとて耳納堂としてうらうの堂として
ひらきなり

室田左大臣在衛文章生の時終る寺よ赤湯なり正徳のふ
乃ちあゝ礼拝とてうらうの十二回蔵りうらうの蔵りうらう
はいて回くれとあす七又許くうらうのふらうの礼ねう
前うらうとてうらうのふらうのふらうのふらうのふらうの
とるふらうのふらうのふらうのふらうのふらうのふらうの
うらうのふらうのふらうのふらうのふらうのふらうのふらうの
窮乏の餘り聊暇暇するうらうの童子家来ハ天皇のうらう

うらうのふらうのふらうのふらうのふらうのふらうのふらうの
成ハ十二のふらうのふらうのふらうのふらうのふらうのふらうの
この時終る寺よ訪てうらうの終る寺よ十二のふらうのふらうの
市よ今終る此時ゆらうのふらうのふらうのふらうのふらうの
とてうらうのふらうのふらうのふらうのふらうのふらうの
うらうのふらうのふらうのふらうのふらうのふらうのふらうの
正徳のふらうのふらうのふらうのふらうのふらうのふらうの

播磨國書字ハ性聖人生もの普賢菩薩とてうらうのふらうの
うらうのふらうのふらうのふらうのふらうのふらうのふらうの
神崎の遊女の長者とてうらうのふらうのふらうのふらうの
けく長者の家とてうらうのふらうのふらうのふらうのふらうの
ありて遊宴礼ありうらうの長者とて横ばうとて教とてうらうの

のどろどうたるよと調まゝ園防じらつてお中なるまゝわらわら風
けあつていりら流まゝ付置入奇異の思と成て狂眠す
時長者思ふ言實の形と取して古牙の白あゝのこゝろ眉ちり
光と出して道徳と思す別微妙の言まゝのこゝろとて云聖教満
のち向ふも塵の風を吹かすも流流まゝの流れたるお財の
とて付置入任作を致して感徳とのこゝろ目と云を付よすおと
夫の形とすして目防れじらつておおん眼をさすこゝろ又弁の形と
取して法文と流ふおおたり年終な聖人おのこゝろ思ひゆらぬ
件の長者思ふまゝて園防より聖人のあゝとてい目と云界外
あゝとて即逝ますけいお聖人おのこゝろ長者思滅の言思
とてさすおのこゝろ書家とていお根法澤とわらる人もある時
お人思能なり對面なるお人信申に答とていおの時置入のこゝろ

さゝかるといひのこゝろおんこゝろおんこゝろおんこゝろおんこゝろ
おんこゝろおんこゝろおんこゝろおんこゝろおんこゝろ

大徳^{性信}は法書令十八歳と取らるる一宿曜の勅文はとてたふ
よりて十八歳の春書法と修して祈るるおのこゝろおのこゝろ
おのこゝろおのこゝろおのこゝろおのこゝろおのこゝろ
件書教十分のよしれりおのこゝろおのこゝろおのこゝろ
おのこゝろおのこゝろおのこゝろおのこゝろおのこゝろ
のち九月七日入滅しおのこゝろ

同法をいせらるる一疾病おのこゝろおのこゝろおのこゝろ
唯一人おのこゝろの弟子おのこゝろおのこゝろおのこゝろ
おのこゝろおのこゝろおのこゝろおのこゝろおのこゝろ
おのこゝろおのこゝろおのこゝろおのこゝろおのこゝろ
おのこゝろおのこゝろおのこゝろおのこゝろおのこゝろ

つ雲ののりておひて天香の等々出依をりてせ給ふとて等々
人ありと

小野宮本原宮缺子八幡宮系院の唐大ニ条岡白の二女也生年

十四の年不備信天ニ条岡白息余見静因坊西一なるひて云とふ法華經紙

文抄て毎日一紙讀誦を給人ありて知とてか一書杖十六とて

入内を治曆四年四月十九日唐唐帝御御を給ふとて

このころ偏道心とて終とて高佛持河の如く他事ゆ一ま

さすニ条東洞院亭とて三川とて寂法とて書寫を給ふ或時

雲白紙とて海とて霽臺あり入る室唐経と華とて人扱とてひて

存ありとてとせりとてとて而時常ありとて天竺より船とてとて

御とて居とてひりさ紙に控とて文書ありとて沙衣ありとてまた

御とて居とてゆ一まさ法法と物とて志とてとてよりありとて深とて

予は承暦元年八月飾とてあしとて出家ありとて良真唐主と

戒師とて西ふとてひし地のをとて入とてありとて再ひ長秋

の曉の月紙とて予姓生の素懐とてけとてありとてらん

清範律師の橘一人無福寺法法おとて室持坊教の法

孫守胡已藤乃とて就法母とてとて文珠の化力とてとて不

也儀ありとて事ありとて計へとて法沙堂入道友實吉とてとて

法とてんとて佛来紙紙とて百信とて居とてとて坊の産とてとておま

を紙儲とて一の書とてとて文珠とてとてわつれ紙とてとて中々

隠とて百信とておま一へらとて法結作吾能とてとてとてさか

法事とてとて仕とてとてれとてとて後決定文珠化力とてとて知あり

世八とてとて法水寺の上綱とてとて号せり

赤河守とてとて定基とてとて識とてとて赤河とてとてとて人の子とてとて家

しと寂寂と云ふ人海唐しく猶の留迹と礼を仿依を交
しき寂寂律の如く物成うくらまらるる巻のよ清く文殊
の如く化ちる故みる因通大師の号と云ふもさるる

内記廣流係流ハ臨陽作噴成忠行り也博士の子と成り
改姓を發心公家後世ハ内記聖人といひ惠心仿依の如
陀打ちまきける折ハ東牛ころりていひまき行まきまき
ゆりしに因通大師の号家言ハころりていひまき行まきまき
かてはあまると云ふ若しく仿依を食とめ流りていひ

河内國うしくは信のまき聖ハ唐より出りまきまき
後世の責成也といひまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

と云ふまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
この入るまきまきまきまきまきまきまきまきまき
ころり日本一の事也まきまきまきまきまきまきまき
堂の中書の抄前といひまきまきまきまきまきまきまき
いふまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
いふまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
いふまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
いふまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

書寫の聖徳縁徳依表といひまきまきまきまきまき
中ハ神女宮まきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

神道類

仿依のまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
伊豫の國の泊る

風波無く東流は半ありてはつと波のまにまの津の津社
影とくせんとして為の流るるまをてり別津の津前を類
とくまてうとせたるは八咫風を放く祭かく悪居せり日本
中一の結書ここの社のおとち成程密ちた類とは世
人業跡也

紀貫之集云紀伊國に津ありて津と馬の社と云ふ
つひと物ゆくりこころありて是れ例とていふ事津の
一物ふとてか社ありていふ事こころ心付てたて置する
津也と記すも新成てらんやひこふてくもかれと
何まき成す事いふ事あはれいとはせんとも計あり
跪くはてし何乃津と云ふ事すうとていふと城通の津
と記す事いふ事いふ事いふ事

かきつりてあやもあはれぬと云ふありとありとありと
伊弉諾因駄院の御八講と云ふ事すり時中社の社なり
り来たる所と云ふ事同一人といふ事いふ事いふ事
甲佐の二位と云ふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
ていふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

放生会行事に准とてうと云ふ事延久二年是始之上御は
大船を陸園あり初年許と壺胡録者と用事二年より
平於録紀の改りていふ事
貞徳の沙所小系と云ふ事宗像の津の社なりと云ふ
洞院のうられはけりと云ふ事車よりりりるをいふ事
時日れはと云ふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
と云ふ事宗像の津の社なりと云ふ事

くてわさせぬけるおんくちにてしをぬきこいと不
役の山半とて神の山後まじりやゆをむひたり

禮儀類

沖那位の時代、主との若くは玉冠は應神天皇の
沙冠也礼服にお具して内藏寮におさめたる後、
糸院の沙冠は同出さくあをせぬたり妙奉つ禊し此
自贖をけるとあり

中原所造播磨守の作く和足沈入たるあまうて慶
賀に申けるも尚と持して之度おまけり入道後
中門の速ありて山後をくけりてけるは神所造之様
入るは尚とくくくくくく考也

若狭所造の多年沈海して筑後八牛納るはほてぬ

初秋奠乃と御と初はそ作法進退の事事ふといて不
着紙をて傍人の四事をす時成通の衆衆とて
存より列るう所形く諸より八年及山院辰よとて公事
沙奈都らうのくくくく食たるまむり理也所形は通
事とないといふくくくくくくくくくくくくくくくくく
河成通報を紙少く用はす海月一人くくくくくくくくく
思ひ方かうくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
後白河院の存在位の所もくくくくくくくくくくくくく
中より礼録をてて天下礼政をゆかき事後之衆院の
沙耐をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くあな事たるより之内とも作らうくくくくくくくくく
あつこの類は法儀との関白をせぬく宮作りたる園日

七年八勸賞のりまて位かしくむらり内宴とくり
とせ婦うそたる事ともおこそるまて者生聖化中
と云文多とて詩紙作くじ喜文前とのうりなぬと
悪せり後済ありて十人乃年姫神あり乳ありま紙
做くく誠の如く付し神を仁和寺法親と拜すと云ふ
り多あり詩とて仁考ありて海より入る八く云留七次
治るる法世の吹とくお撲の節もは法代再興とく
十七者より納之通憲とて入法は法師と成り信西
中けるわくまをたはすまをりて目出度代とてまきり
あじ紀内侍と云は法世の世はとく信西の室也と云ふ
信西より月十をまをくまきりやそく回つひと云ふ
内侍はあゆりてとて時とある歌

すうまは法代の世はたかまきりたかたの松と云ふや
二条流沙住し即せ流く保元は正月七日今年も内宴
有公卿七人は位は位十八人文はりてうりせくる席は
或部人補永範書ゆり歌は紀下権守と拜法世の関白
まは獻せしる鼻姫今年はうりてまきりまきり
通憲法師神社のくくとて諸をうりせゆると云ふや

好色類

二条流しきり内へまのりむいさる時業平中将とあひく
通ゆる或時度はわくかくまきりんまきりとせうと逢う
ひくして則中ねの幸島はまらり中將後せん神
く歌枕みむなりと閑あくと向と奥列の八十路と高き
秋夜中し初秋の上句と流する勢とて詞社風の歌

下ふあめめくしききあもふつさそ求る人なりた
下のさきうへくちわねるはをいんふうはうへ目
の元より為生しころり風の吹ぬる為のあひくる秋の
上句はさきより奇美のさひとあすち成入る小野所
世國へ下向してはあそをたつころりなりとさきよ
中約者よさひして下の白紙付てさわねいんうへ
たり件をとくむ作のわねとさきよあひ

賢中よ白河院の世宗も他よ異なりあはれ
してねむりいままはせ光急の時も区出とゆさ
おまはねる閑暇のゆもね抱泣ひて起まぬり時
各へしてやと帝者荒曹の例あつたの事よとさ
孝も人さきよと美勅者も例を世よりとさねま
わく

作り

道令河内院はた経心の息やとさきよ
何人皆を公と教よりとさきよ
初系式部はあひてま今の存院方よ
款治あそとさきよとさきよ
うとねるあそとさきよ
次の何様と帝教と所とて
あおる世宗のしとさきよ
うと唯今の市河は行水とさきよ
湯屋関をよとさきよ
て候ゆありとさきよ

小野宮者府實資とさきよ

いさぐの世もてお後のなり世より子孫の世もち感ん
ゆは年ぬた

秋ののりいし葉いともかきくは秋のともせのねるのま
を今たを成宮よりうへを流るぬたぬくまきく

奥遊歌

古来の式部卿の宮くかあつは延老の御門のむら門脈の

おとふねく物と野のゆきとをせ流ひくは世文依を

せしめ流りけきく京のやとま系をせ流くうく

の宮たう系あもせむりくは流くくくあつめくゆき

たてくあつを流くはあきくくくくくくくくくくくくく

と二のくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

幸は流りうりたる人く留具く流くぬおくゆつも

奥を流りく食なるゆきとくくくくくくくくくくく

あつ山にりくを流ひく御あつせうとらひくは

きり乃ちとらうくくくくくくくくくくくくくく

かくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

山乃ゆ葉流とよりたるうきりたるは色ハやと白く

きくくはあひむちやうれりくくくくくくくくくく

ていり流を撤く雪すくくくくくくくくくくくく

事やいりくくくくくくくくくくくくくくくく

沖堂及の丁をくくくくくくくくくくくくくく

水菅流の舟和歌の流くくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

入る度より大細をいつもの事よりよくしきつねに
初秋の移りゆくをゆくんのゆくよきかたりしうう

小倉心算のせれをうらもいねきあつしききあひふ

入る感しける物也みつしうもれはゆかりを作文のあよの

こころかたりれ詩と作ししきしうは名れあつしき事

ゆかりとをりし口惜りしけるうらもいねきあつしき入道あま

いつしううのゆくしきしうあん秋かつしうれあつしきし

しうはゆふをりし事のすくろくなまきよくいつれ乃道

よもねを出ぬらんおとゆねる也

延長四十九

延長中つ大お河の孝に元少為のれ具本の四肢の雅明

のあ子の七歳そくおききせぬししうとけりしきゆきりし

百人あつたれぬ入ゆりしりれ餘りゆりしり乃ゆりやう

あつしうい山のうらめてるなまのこけりしうう

亦因融院大井河道達の河心信々しき船のりしうも

成程の信信々亦此入ふとししうとけりし白河院お河の

孝は河の信信信と亦此信てとたの人こしとわりの

きしれりし小信信のれ生者のるしお小信氣さあし

うらとらりしことりしきしうあつしりしりし事

人よそいしけりし船やしお船をえししとれりし

あつしりしりしけりしかくいしとししう進系しりし

お信信のれなうてし秋とけりしとれりしとけりし

はらまき也

右東齋随筆以古寫二本校出う

右四百八十八雜部

文政十四年卯年二月廿八日於紙用郷寫之

中村直道

薰稿錄卷之百十九

薰稿錄卷之百十九

中村直道輯錄

公武大略略記

一禁裏

帝王乃御車ハ一天の之御鞆也といふも天子ハ
聖王聖王令輪大宅大内禁裏今上上當今階下
階下震儀鳳朝庭外中なるは是君御車也云
武備儀もハ諸儀ハ武備内ニ号ハるハハ法ハると遠
近もハ行幸もハ又和弁ハ出ハるハ御門ハ
出熱名もハ御ハ皇王ハ二字同訓何と書ハ下佐山
六角山禁庭百歳大官九重雲井外もハ法禁殿の御
車也ハ御鞆類宸襟敷意敷有也ハ是同ハ君

乃御紙ハ詔書勅書勅定勅裁風詔綸令編言綵
綸綸命宣旨宣命宣下聖旨外也初御紙
トナリトシテ又詔勅乃二字何とモリ下又ナリ
ナリ紙卷字々考一以爲下と勅同く中此迄ナリ
勅書ト申也又勅許勅封勅願勅判勅恐のナリハ何
帝王御事ノ中此子詔紙ハ勅第度等度御事也

當今御講義仁ト申モリは宗光院具仁乃若孫榮仁
親王法名通智の御孫自成一親王法名通欽後ハ太上法皇爲号
申シクテ後宗光院ト申モリハ御事トシテ成仁友の
御事トシテモセハハナリ小倉ノ御事トシテモナリ
御事トシテ厚シ人王の御孫神武天皇より今一百六世ハ御
後ハ高麗セシメ去御ハ正長元年戊申七月廿日後小松

院御定法王幹御孫神孫光院具仁ト申モリ御門
崩逝ナリ乃御事トシテ年十歳トシテ小松法皇ハ養子
トシテ御孫位あり翌年己酉即位ありテ永享ト改
元トシテ御事トシテ永享二年庚戌年二条攝政後福照院
関白太政大臣持基ハ良御事トシテ御孫大業令ハハリ普
廣院賜大相國義教法名通善右近衛の太將トシテ七月ハ
乃官廳御事トシテ御孫位あり攝政後同由廣トナリ
御事トシテ日親御孫御事あり此同ハ年癸丑正月二日皇上
以元服其時ハ二條太政大臣持基トシテ攝政トシテ御事
ナリ御事トシテ今年長祿二年戊寅ハ皇孫御事トシテ御事
三十年ハあり利貞御事トシテ成徳

一 仙院

天子御位とすつとせ給ひてと天皇は昔号御しつと
院の御所は改めせりふと上皇は洞御しつと又和歌
の詠は歌射山緑洞御しつと昔は院の所なりと或
傳信より大治御多岐院希と号は御所なりと昔年と
中興の政勢に付ての勅定と改定と御是

一 后宮

后宮と申すは古今此きされの御事之御妃の位は御り
りふと立居しつと又女御文長の出入内御しつと御りて
上代は上代に后宮相並百枝の御とたけ系とせ給ひ
たりふと立居しつと昔の御事にも百友は仕つせりふと
然ん中督有中文職御しつと昔后宮方乃后職也其
後を中興しつと御称号を御しつと昔の御事にも

其御事と申すは戸を御懸新とせ給ひつと御り
夫の帝位を御りせりふと後或は女院或は國母と申す
系とせつと院号御りつと昔の御事にも御り

一 親王

當今御皇太子御と春宮と申すは御りつと御り
久し御りつと昔の御事にも御りつと御りつと御り
此若宮或は皇太子の御連枝或は御室以下の御り御り
お續宮と申すは御りつと昔の御事にも御りつと御り
宣命御事と申すは御りつと昔の御事にも御りつと御り
御りつと申すは御りつと昔の御事にも御りつと御り
あり御室御法門御法親王と申すは御りつと御りつと御り
宣下御事

沖當職とすなり奉ハ君の十六の也沖元取公
初之沖堂解の程八年中仍りハ執柄あり執柄あり
によりて折致と名ハ祇祿一沖首取の後ハ関白とす也
折致とハ折祿とす関白の時ハ博隆及下とす也
九条家の叢祖ハ光の君と禪定及下道家と也在俗と
奉存しりゆり一沖息ハ洞院折致実白教実より
今大納言政実と名ハ八代執柄の中ハ道清及下次を
てハ此家の宗家の長子よりけつとすてと名ハ家督執
よありて世のわたりて外よりゆり也

二條家の叢祖同宗家の息満光園の関白及下実白
よありて及下政実持道と名ハ九代ハ家のつりハ
月輪法性坊の末幡江色外よりして或ハ卿相或
と雲宗と名ハ朝家よね綱あり

一條家の叢祖同宗家の息園明寺ハ折致関白及下
実白と名ハ折致実白及下准三官兼良と名ハ
よあり七世也

山崎家の叢祖執柄家ハ初ハ仍留司及下道清及下
橋祿と名ハ折家の及下及下道九二一ハ世終る者少し也

一 二家 洞院 中流

凡執柄家ハ次て二部と云九家と名ハ初ハゆり云家中
にといて及下執柄の流也及下二家 轉法橋の家ハ
洞院の家督より彼叢祖洞院及下及下及下及下及下
及下初ハ九條右丞相仲備と名ハ沖息ハ仁義と名ハ
よあり今之二条右府實量と名ハ十八世也又仁義と名ハ

八代よりして左大臣実房の息公房兄貴ありと兄公房公
家督は号以終りぬが公氏庶流正親町二條の先人
として今内大臣實雅の舎弟亞相の細川より如く庶
子想懐ありひよりりて其より由代より十世あり

西園寺因茂家の異祖公実心は息通季より今の
公房よりより十代也持明院京都御持本御と名は一流也
菊亭北家とは公川と号はもと通季より今敬季に
より十代也洞院の家も通季より今内府実照
より十二代也口述の家は八段内と号はもと通季より
今季後より十二代也親町と八裏築地と号はこれ又
通季よりよりと持季よりと十世也其外清水谷小倉河井
流野井一条おといはれども通季の苗裔也徳大寺家の

異祖公実心は息実信より今左大将公有迄十二世親柄
の後流として因茂の流大概は都也何れも古今の物
味綿々たる也

中流家村上天皇の皇子中誓々具年親王御子御房公
より深姓流終りしと文終り今久我通尚公に初まり
十七代はつ次第は坊川土御門二條坊の中流子孫の系
是宿唐揚等也又北島と稱して一流氏族あり伊勢
國司は後之故之祖親厚の依文也と卷准之居九家の雅
居也妙之但之故之祖親厚の依文也と卷准之居九家の雅
居也具に流よりよりと中流の系通の系通より
通具也光御といは家の先人や

新山流家異祖京極持政を故大臣御実心は息也

大臣家忠より今時忠に到るまで十代に計りて
大炊御門家の攝政御実成の男御実成と異祖
て内府信宗と傳へ十六代也亦中山の始は内府忠
親也忠親より今更相親通々に到りて十代故
忠親の御子に到るまで傳流の美雅とて内府忠
の事と大炊家の記録と申せしむるや此の
并れ一流に記山の後裔也吾誠雅親と異祖
其子教定雅有雅孝家雅雅依雅世今其子の雅
親と八世の専和奇蹴鞠二道と家業とに雅波の
家も雅依の速技利和の宗長は苗裔宗長より今
宗相の御子とて八代も蹴鞠の流儀なり如は家
の家督と凡成とも成とも号しゆ也は之流の正
嫡よりとて八代が階の昇進納奉のれも侍親
御親して兼途不滞して大炊大臣則關の宿も此の
侍の御攝禱の任なりとて八代が家成法起と号し
和守の御子に到るまで傳流の美雅とて内府忠
の御子に到るまで傳流の美雅とて内府忠
の御子に到るまで傳流の美雅とて内府忠

一 武家

征夷大將軍源義政御先祖を清和天皇の御孫
の王孫の御孫とて傳流其基を天徳六年六月
十の御孫の御孫とて傳流其子孫の御孫
其子孫の御孫とて傳流其子孫の御孫

一男
賴義其子伊予守義家とて八幡宮御義家と号す
治男甲斐守義綱は父義次御と稱し之男義光と
新羅之御と号して各子孫ありて尚代々馬乃道の
中津範にありてゆり小笠原其外武田信井の如くは皆
新羅之御乃末葉之御り小義家ののみ義國義康
義弟義氏恭氏賴氏在時貞成とて九代と稱す
貞成の息と利治初大輔尊氏等持院贈大后友
乃以時代とありてゆり其子次征夷大將軍義
隆とは室筵院贈大后友とゆり其子次征夷大
准后義満法名天廣國院友とゆり其子次
内后義持公法名清定院友贈大相公とゆり其子
次征夷大將軍義景とゆり其子八世と号せしむ

ゆりて内府に先主とて世に長徳院とゆり其子
玄如の息承於六年戊申正月十八日義持將軍の薨
逝とて百有運院の跡とてゆりてゆり其子運徳
光院贈大后國義教法名若御猶子の御とてゆり其子
有て年号正長と稱すゆり又普光院友の若君
征夷大將軍義綱とゆり其子十歳とゆり
嘉吉二年癸亥七月廿一日にゆり其子八世と号す
ゆり其子公方様山之岐の息とてゆり其子世治
ゆり其子世治又國承の之君に等持院友の御息大
瑞永守とてゆり其子世治とてゆり其子世治
ゆり其子世治又國承の之君に等持院友の御息大

義純は八高山の先祖也義純恭園は園家園義深
基園長福も及浦家貞親寺及持田光孝寺及義勝と
九代也義純舎舟近江も義胤は桃井の娘也且利
たも助義純は八高山は義胤は上総今川乃娘
尾澤も家氏ハ新波石橋のうら次郎義顯は淡川の娘
且利頼氏ハ石橋の娘且利法良も恭氏の息宮内々
律卿と深ハ一色乃娘也且利範氏也詮範浦範義貫
義忠七世之律卿義舟ハ上地乃娘法中賢實ハ小
侯の娘也且利兄重ハ八高山なり六郎基氏ハ加子乃娘
ゆと七人ハ左衛門源恭氏乃息也亦新田山名里也亦の
先祖ハ義重とリハ且利義弟の四伯父也又仁本
細川の先祖也且利是田九利也代義法とリハ義弟
の舎弟也又新田惣願大館次郎家氏とリハ新田大次
助義弟の舎弟也家氏よりハ大館兵庫以教氏とハ
代次次介大井田大徳竹林牛込与山浦一井乃川
世は田江田嘉川田中戸賀徳松吉也何と所高
家の子孫也

一家

法家の中に先祖より近藤司成法中が将中將より昇進
し武官と兼叙易以帯けり或は羽林次將とのひて叙
爵の如く侍たり或は又文章法也として儒者とありハ
亦官と稱て万軍とありす或は名家と稱して叙爵
の如く侍たり或は又文章法也として儒者とありハ
サありし其階級と稱てふははむり侍り也即相の如

宰相といはれたるの人多くは第はるより古今の例に亦
宿とは蘭基蘭者夕郎の稱を羽林も宰相と
中將と爲してはるる事と家の名は其時の花様は
ゆれも多分と家の條流する人分ふりて宰相の中
將と稱しゆり也宰相といはる後ねは八代のお中
幼少家の最祖小良の事ありしゆりし事との
教考ゆと女三代はつてはるる事と西万里の事あり
宗法閑寺小川坊城中四門あり

日野家の最祖真夏演雄あり向日野家松尾光と
十八世之東松の家の為成子宗成の家創始年は一門
も馬丸大納言資任は切解由小幡廣橋柳宗武名
小幡法性あり也

日野家の如く房系といはるる事と南家
中納言家成は其後澄房澄親あり也其名あり今猶
尾中將澄頼は近女二代也此の事も池小幡大納言
澄夏松系大納言澄盛北高西大路中納言澄富西川系宰相
等之山科の如く大納言実教といはるる事と成の息之
實教より今九世あり花深の園司小幡坊小幡といはる
冷泉家二系先祖長家といはるる事と其子澄中
納言定家といはるる事と相也は時より冷泉家
号は次より考わす今れは富御也家の長子
の氏は世に重なる事ありて絶て一系累代和
歌の各道よりふりて世承知する事あり

世の寺の最祖侍次大納言の成は日本公家の右軍あり

柔世にて神代より中納言の職よりしては御理の成
道風と云はれり是行成の中よりなる宗族伊忠と十六世に
後小次郎伊忠氏は親王也云々は鄂曲と家業とに庭田
の流も同

中納言門下松尾祖太右衛門頼宗より大納言末徳より
十六世あり高倉の先祖各議法御より今友牛納言
長量と廿世ありといはれ中納言楊梅頼国は太官と様
おはせりといふて友氏清代の名家なりといふも世流
香ふり果と名のとちてと実か

一菅家の事右も聖廟の出来といふも權右衛門と名と
は祖祚者お聖代小風月れといふも於化の出来といふ
一は今猶儒業と墮さす紀典文章博士といふも朝の

侍流よりいふも紫教をありといふも坊城の菅中納言
益長は家督より度流といふ條の清菅二任長次郎坊西
戒土生坊城純長号ち北地長者在在等也

一諸道外記官務
典茶法湯

法道の中にも大少外記史の清中納言氏累代の家業に
向代清之任業忠法名は常名清大外記頼業法名は常名苗
裔也中納言の師卿法名は常名師世師勝師友師有等也
何れも經典の儒名を兼てて明法の御道博士に仰
て天下れ云事は記流一書に記され流書より参
仕て之を介と云の御沙法実習と記され御流より自に舊
記といふ御流と記をす一重職也

官長者職の事小槻氏累代お續也最照右孫同晴

富永系の坊門士生に唐任せしむる宿務也尚友務
長具宿務の後小坂大宮に私宅あり近來ハ土御門
大宮也日本國中神社佛寺に弟創縁起及六歳七道
の莊園田畠ありて御為の時古今法令文書と
引勘約て中々重役也仍宿務記と尚局と号し
醫家ハ和家丹波南氏と傳へ御恩に流し家業と嗜
ゆる也典義院龍業院使おし司と号し並れ月次具
の湯茶飯調をん

法湯は賀茂安徳の南氏五代也何れ御家の山敷うて
沖身因及用おし中々小坂湯と号し之厩博士兼博士
漏討博士天文道博士法湯は法湯院おし司あり是
とも醫法お局と号し御家賀茂乃在貞同在盛跡之ハ

先祖より厩道以承りて毎歲沖厩と調を戸女氏
在季に晴明々苗裔奇儀恭親の後流也南氏とて天
文道院承りて之爰比妖々此の怪異とらひしや
勅文と号し但是之凡の由定めて時々酒ひぬれと
いふこと作付りるも上宗にあり

神祇伯家兼伊勢社祭司同進官使或古田平親大系
北宮の神々其外賀茂院御家ハ橘の社務と号し日吉
春日宮に神宮号し神宮の社例茶佛時宗礼等此
儀とありあり又古神宮兼季の由祭其日宗の勅使
日吉の祭礼石清水放生大寺小上御齋儀辨次將御
導所以下系向の儀ハ時の貫首奉納の女衆人お勅
定候事々兼り此教書成儀なり

長祿二年二月四日

宣長

年終六十四

右六百人雜部

文政十四年卯春二月二日於益城郡依用卿寫之

中村直道

薰菫錄卷之百二十終

薰菫錄卷之百二十終

中村直道輯録

安元御賀記

前大納言隆房卿

安元二年三月廿三日... 日世治り時春なれ... 乃折み津もあ... 法皇いそちに満... ちら湯治ゆかり... 初筆の字百の... 院乃御所一町... 西のう川あり... 多つゝきたら...

代とよりひし十をひすまも一にの事なるぬ
うり耐法皇出御大床子のいぬわの方をませし金と
仁和寺法親王^{寺之}之衣の箱とぬく山前よとくはま
関白^{帛裕}とぬく後大皇出御此市に沙拜果
て二所入御其後二所の後らぬうもつる五位より
沙汰の座と改じ又法皇出御法親王之衣の箱を
大床子のきほをぬく山前よとくはま
つるを治とよりぬく後大皇出御此市に沙拜果
門のうらひ川花人とぬくぬ後籠物とぬく
ぬきぬ花人とぬくぬ五位より入にまつくゆ
ふの川方とゆくよりてやふとぬく是と捧けて御
前のをふすの公卿一並ひぬく入の法内法諸衛

判友の二并ひあり定つて後物の名とより小左左
院乃別由とより頭右大臣長方御中門のより
別當判友代とむくく一毎にゆり前よりて籠物
とゆくは後とゆく中門のよりぬく行車れを
多いらん^{献物}とゆくは一ぬくくひぬすは度の上
ぬく中宮^{隆季}右史事とゆくぬえのり物のかり糸の
ゆかぬのうら院乃ぬく入共教主とゆくく一とゆ
進武とより進入らぬぬ院の四方に沙前の物
ぬくすの臨臨大納言際常改送宰相内乃四方
のあの物臨臨大納言際常改送宰相内乃四方
以下四位五位之例 右馬頭 右中弁 時實 少将 親
宗 左弁 資盛 侍従 入御 五位 殿 入沙 結束 といふ

如座はらまるとくねくぬは廂の物才七の同信洞うあん
式技とままに錦の匂り龍鬚んとのへく廣
涕乃蘭とまて院の御座を東西北の大扇風三
てう紙まをくぬくう次回一さるの南物のうまをま
れて同一法廂の物才の同うあん二枚とまくとまに
示京はあまは侍はあてて空の御座を次う
は糸のまはうふ差の糸座とまて法親王は座をす
回一まはけうの西はまのこふ糸座とまてふ々の座を
危右を東胡座紙多はうもんまうまうおのふ座を
一うま次う遊清はま胡座はく次二所お御
園白沙茶はまうつく山中将のむ糸座をま次
大座山下沙茶前の法はつら園白お茶お座よりめを

百て法親王めまきまうとあぬま次まの所乃友上人を
くおりのなうはく中宮ま座をまらて音声を
促さ行ゆまをりまをく年入樂人中門よ并ひ
う川礼参となま川九次よ右つふふた皆あけま
ま紙ゆく舞人の嬉末た吉まのうまはまぬまひま
うり乃もんむ柳の下かま糸座をうはう人の袴はまん
のむ法虎豹こ座うはまらまや線鞋まらまらありあ
くあわいけつ子おわく右回一はう人法まぬまう
られまんむ柳の下かま山吹のまはまうぬまんの
切うとち竹く弱ぬまらまらまやま外帝おまはは紙
花人所の座かまの紙をくまぬたを虎とつ櫻をま
井まは山吹殿舞王恩と次ま山前の座をまぬま川

五七控のまげかねにねり公事海客入候をいふ書文
けりしはさぬそやうのうへの袴もえきを頼の巻物も
ありきしにわさう白ひみりえぬ人あきなり次心あき
おほしきさうゆこかきしつ橋はうこあきぬ舞殿をえ
ゆり入付院のゆまへとらふ殿と人と沙使めくりにてふ
の宿はあひあひさうはくしきふあふふゆへくみは
りてさく女流の織物わびやけさへ紅のし袴うて
冥白御使えきまうするに父の太将座とましくありあ
け家とぬくおのこさふもて院と洋一奉りしはねの
めいおくさ付おねとはあきひさくせぬきし一かき入は
んくもいふさうわあさうきんつさへあき人衆へ
あきとあきふああさくむいさうは行幸は宰相と白紙大

うりた衆人衆へ六丈のきぬとあきす是と衆さう万歳
樂はねぬ親ま公御ふはいつさひとあきまひとさうぬ
まさうらあきまひと吹あきあきし川きぬら介は
まさうけいあきとあきぬた乃府にもあき西の中つ日
い川其後胡麻とさう山馬十七年文のうけとまき
院まきとあきふ殿と乃沙府と口さうとて沙沙乃
会人志あきとあきぬ た中將弘盛番長以上右中將通親龍丸中將
雅長中宮亮重衛丸中將資盛在り將法通
新少將親信在り將
時實丸馬次信基 時小あきとさう小あきの事わける人
沙きしは也あきとあきあきあきあきあきあきあき
乃掃はまきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
乃掃はまきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
うりゆまきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

川より又増えしといふを流るる海やまたましく其後見
し^{馬道}姑泊坂の免をうら祭川ぞくみよ庭のりい給と
其後又復然の具とせ^次笙^きり^ら笛^さら^ら九^びり^り紀
名^心正^王言^上筆^事和^琴を^うあ^まく^と願^ふ人^り事
系^取此^をの^りと^のあ^まひ^しと^のあ^まひ^の笛^と箱
乃^蓋に入^く天皇^み奉^侍在^大臣^兼實^権内^大臣
師^長筆^中宮^方史^隆季^等大^納言^さふ^る笛^梅祭^使を
柏^子左^衛相^と藤^家和^琴と^あら^うし^り少^将左^中将
和^盛ま^いか^つつ^あら^うし^り海^河そ^うと^うら^かを^うこ^せ
り^おと^し河^内賀^殿の^きり^次又^平調^侍海^河
ま^りら^く女^のい^のき^のり^あま^七御^笛の^音を
今^をき^こひ^ちか^いり^もあ^らう^やら^むし^こあ^らう^らま^り

か^夢に^あら^う神^{なり}又^祚也^此る^法親^まり^海
を^流ふ^之重^れ白^に織^物の^うり^た一^との^紅の^うり^の
わ^らう^たり^一領^白き^大祓^二領^九兵^清務^教盛^也と^り
か^らゆ^く教^是を^祭ら^れる^大臣^云御^の庭^はば^さ
り^あら^う中^門め^まあ^らわ^れけ^りて^院司^の名^取ら^るふ^し時^い
ら^くに^院司^の中^門乃^むん^とけ^みら^るに^海と^流
る^をそ^のわ^り流^あら^はせ^る御^供の^名御^は下^にり^く
流^ふ之^後二^所入^御上^下乃^むん^との^あぬ^まと^てら^れれ^ば
六^日も^成ぬ^あら^は後^宴に^くき^めら^る事^のあ^らま^り
た^らあ^らう^言さ^しと^あ同^白以下^宿直^装束^とる^新集
ま^り在^大臣^紅の^おら^ぬと^もら^れ清^府を^あら^うこ^のい^ら

けと懸くつわなをわはわたりはるし海もあひくは
ありとのふく西の約遊の色はゆふま中へ将監あけ
らるるやとらなりやとひぬんあはれらんはと
下にゆる糸ありてのみ事病と書赤地は綿のきぬよ白
地の綿はむしへる糸帯をけしきやうはうりーと
ゆし小箱きむ人外よりせうおあそへたきーに成ーとさ
きんーのうり柳の下にものあさうーとらうらひとを
けり唐紅のきぬあさねるむしへるうらひも又か
海ありと記つむしき交りしとさうぬあを記関白
越力四人は乗り心とけりせよをり春をきうりに梅の
記とつぎ夏を白うらに松う散とばり秋とをわうれ
うら小箱あひつる冬をきうらひうらねうらひと産に鳥と

竹うりかゝる事方あも成ぬ今は松よ紫あをぬへり
中を女流女房は船と東の約遊ふら女房の船は後
の産人と記しう中六の所を女房の舟を内の人
とそ約し成と記しうすひ海くさゆくお袖くら
とけ船のうらうへふ出せりお紙つゝぬさ海とさ記お
うのこの入港物と記しこせり詞とらふうりさー免
あも書らうらぬくあを後右大臣兼実内大臣師長右大将
重盛於大納言隆重とひくた中納言の保まらら資方
丸中将知盛以中納言保のひ中を亮重徳左中将頼
実於亮右将ら重盛左将ありと侍従資盛ゆと
かゝらるるやとらなりやとひぬんあはれらんはと
の記しをこれゆりかゝる事方あも成ぬ今は松よ紫あをぬへり

つとむるより中務治友よりて船へ乗入棹とて
是より京河より菅経の奥を脱りけり方よとてこの
関白忠告れて御前の忠告よりゆへに治友内方京
よりめま中宮兩院へおれりより山陰へ山内池水
乃ち京河へゆきしすめ給ふもふつとてあるは
船の夕暮へてふりて御河をよけしとて既して
ありしとてふりまをりし船よりとふりておれりより
御よく御前のおれりし京河へゆきしとて御よ中宮へ
ありし船よりとて御よを御よとてゆきしとて
又ゆきし御よとてゆきしとて御よとてゆきしとて
言さし御よとて御よの言とて御よとて御よとて
よと御よとて御よとて御よとて御よとて御よと

先きん笛すくれをりけるはあひくを中務内大臣
琴をひきしとて御よとて御よとて御よとて御よと
亮重衡内中ゆきし御よとて御よとて御よとて御よと
川方小河せりけりし御よとて御よとて御よとて御よと
乃又つと御よとて御よとて御よとて御よとて御よと
其後とて御よとて御よとて御よとて御よとて御よと
一川吉柳まんじりし御よとて御よとて御よとて御よと
いふきし御よとて御よとて御よとて御よとて御よと
艘をなか御前の江小溝へゆきし御よとて御よとて御よと
とて御よとて御よとて御よとて御よとて御よと
いふ御よとて御よとて御よとて御よとて御よと
ありし御よとて御よとて御よとて御よとて御よと
御よとて御よとて御よとて御よとて御よと

心くゆひきしきしあまきりを成陸勇をとりて釣魚へ
流わるとくはきりう東流方(由流ぬ氣の物とむくよそ
似きり)その後九右ありひま宮と春を九春馬嶋
序一及親臨二及入破 送声と吹あひ多因白花人右抄女
三及多声一及控声一及 三付まきうはあして内大臣中宮事又隆李藤大納言
実因あせり流方樂屋へ引居さうと作し物乃屯
あときまさんうわたり流あひひく又親王并にふゆはひ
く糸流流ふ右右馬籾の川澄房ゆさかしく小松乃と
とあして河くせかひな紋まふ指の常好声小春馬嶋
きく樂あり汀乃流乃糸ふふふふとそとよく河くさう
流流しきり見よとまじく印前の物とあし次臨臨
大納言あし物く役供宰相は後内大臣中宮事又隆李

叔大納言実因按察資貫樂屋へ引け外、源大納言源中納
言樂屋へ引居さう事あれたとあ人くは具してゆく又内
大臣叔大納言と胡麻乃北と孝乃とくはは汀と歌控く
又とくくましく古之將を吉海波乃装束の乃に一家の人と
た清の清宗盛乃中将知盛中宮亮重衡控元が將惟盛
右乃の資盛乃女將法経吾樂流忠房越前と通盛是ら
流川具し多樂屋へ引居さう共いさひひ人まくとあり
又新へ後流乃具と樂屋へとくはく内大臣と瓜うへ
らうのち籾果くた忠流胡麻と取藏人源實宗重衡以下
流と人四十余人西の中つらと西和瓜とありて樂屋れむつ
しと流乃をさしゆかきさけらうし流のまう也大納言と
らう流んむとまじくは時流流とくしと吹次よ笛とむ

にひそはしとねたし多沙使は白の糸の節金
百兩と入て送るに院よりしりて物よりきふや
りねく作事あり御遊の間に大石以下に福紙紙を
其後二所入御又院の四方に祭所をり此中細を
以使り多は度々の御賀紙をりなくとけとさ
りまぬふらんちり事と行由故を事持小信ひ思
しと陰事ありし作るに於て人々勸賞とあり
之後御樂と床後方の南のしりしを事選御書入
樂人共其装束ありしはかつかし油紙のりし
りねくしきとに院よりしりてやけしに院
行幸成りしとにぬふ年を事ありしにむらとせり
しりし事持入るる風のしりしに事ありし
とに院よりしりてねくしりしとに院よりしり
り

右安元御賀記以屋代弘賢校本書寫以杖乘拾葉集校合

右五百廿九雜部

天保二年卯年春三月二十三日於砥用郷寫之

中村直道

薰菑錄卷之百廿七

董積録巻之百廿貳

中村直道輯録

松名院古齋七十頌記

おく入道希お去五十七此義を記すらんため七
 十そ乃お方とすまめ彼高行して歌人を扱ふ
 上務海知やせむと人よ美歌を採りて一巻と
 初む湖海酬りて松中細く為益つやとてあよる十
 首は詠ふとぬりて世高き所よ弘むまこやふ
 ち奈之品たはれのきりも引ぬへさかろ苗裔たる人乃
 心ありと感懐あふたりや入道おね府和歌ありとてや
 抑此其の好とて望ふ不絶一巻一續の終冊
 中流んとすれよ五十七そ終らるる浦月乃五流とす

杉ノ移入たるをせむと御製

昔も此の松の木の七とを成す十のうはむふより
海一はむじかく御意のかさけなれたる入たるは
さうはむじかく御意のかさけなれたる入たるは
地とてかたしと

君の成る松は七とせしむるはむじかくのあや松の
みまけむじかくのあや松のあや松の

野の松をあげてを松のつる一とて松を井の家
けさ又乃日松は松のつる一とて松を井の家
松のつる一とて松を井の家
と松のつる一とて松を井の家
一松のつる一とて松を井の家

前内府の松は松のつる一とて松を井の家
二年四月廿四日ありきやと松のつる一とて松を井の家
松のつる一とて松を井の家
松のつる一とて松を井の家
松のつる一とて松を井の家

三春

仍覺

松のつる一とて松を井の家

胡鹿

仍覺

松のつる一とて松を井の家

為篤

仍覺

松のつる一とて松を井の家

残雪

晴良

方々今春は清く春の日の光をいかにや春は白雲

若菜

菜豆

春の日の光をいかにや春は白雲

里梅

公卿

ゆきの白く難波の月よ信州の山よ色香は春の光

笠梅

空園

初春の光をいかにや春は白雲

春月

等祿

花の白く難波の月よ信州の山よ色香は春の光

春暁

雅個

春の日の光をいかにや春は白雲

歸鳥

邦富

春の日の光をいかにや春は白雲

春月

甲老

春の日の光をいかにや春は白雲

岸柳

為益

春の日の光をいかにや春は白雲

結花

雅業

春の日の光をいかにや春は白雲

初花

通好

春の日の光をいかにや春は白雲

見花

孝遠

春の日の光をいかにや春は白雲

花盛

阿茶丸

年とてからたりみゆ極むけはた下ひらぬと云ふは

海毛

推房

の事なまふとていふはたを初めりてと云ふは

能久

孝親

て去る句よりいふは縁ん八重の葉の元は

池原

親氏

池原の和ふもさる葉のやふれを初めてふまは

暮春

徳元

池原の事記さるもみゆは春のわたりは春の葉

更衣

永家

法人の事記さるはたは衣の事記さるは

卯吉

以清

末をいふは法にまはるは光をいふは

結節

元理

結節は事記さるは人時を記さるは

同節

長慶

久留米の事記さるは世を記さるは

節と稀

永相

事今約さるは浮を記さるは

お心揃

左洞

いふ世又昔よりまていふは

早苗

玄哉

うゆらひは縁の事記さるは

お月

晴書

幾とせり那とくそ有ぬ新のあめあふかりの玉水

栢河

宗月

わよあふ新と遊るやうかひあふ半ばあふ新のあふん

兼登

乙遠

日たきてあふ新と村の言くもみえくそあふ新

夏柳

福興

あふ新と遊るあふ新とあふ新とあふ新とあふ新と

五月

主保

あふ新とあふ新とあふ新とあふ新とあふ新とあふ新と

夕夕

通乃

あふ新とあふ新とあふ新とあふ新とあふ新とあふ新と

杜伴

福喜

あふ新とあふ新とあふ新とあふ新とあふ新とあふ新と

友縁

あふ新とあふ新とあふ新とあふ新とあふ新とあふ新と

早秋

雅徳

あふ新とあふ新とあふ新とあふ新とあふ新とあふ新と

七夕

晴良

あふ新とあふ新とあふ新とあふ新とあふ新とあふ新と

菰風

公胡

あふ新とあふ新とあふ新とあふ新とあふ新とあふ新と

萩や海

親儀

あふ新とあふ新とあふ新とあふ新とあふ新とあふ新と

女郎花

公志

とく病のあはれをそひひく女は世のあはれは秋風の音

夕去

雅業

都心ゆくまゝあはれを夕去る人よのまのあやめあはる

秋麻

色保

炭秋のあはれあはれを夕去るの秋友のあはれをそひひ

初彦

為仲

月よりあはれあはれを夕去るの秋友のあはれをそひひ

秋夕

秋夏

山深のあやらの月と想ひつゝあはれ秋のあはれをそひひ

山月

紅包

あはれあはれを夕去るの秋友のあはれをそひひ

野月

法種

幼来いひはれ病の月とてあはれあはれをそひひ

河月

公歌

末をくはれあはれあはれ河原もあはれあはれ月や流るるる

江月

林寺

あはれあはれを夕去るの秋友のあはれをそひひ

浦月

約空

あはれあはれを夕去るの秋友のあはれをそひひ

羅菊

竹堂

白あはれあはれを夕去るの秋友のあはれをそひひ

持衣

色保

あはれあはれを夕去るの秋友のあはれをそひひ

晴雲

老親

月影の如くはるかに朝霧の暮りてはまて山家も

同紅紫

初景

日影の如くはるかに朝霧の暮りてはまて山家も

庭紅紫

初景

秋の夕陽の如くはるかに朝霧の暮りてはまて山家も

九月盡

室雅

年終の夕陽の如くはるかに朝霧の暮りてはまて山家も

初冬

手考

秋の夕陽の如くはるかに朝霧の暮りてはまて山家も

時雨

經元

秋の夕陽の如くはるかに朝霧の暮りてはまて山家も

海峯

晴秀

と秋の夕陽の如くはるかに朝霧の暮りてはまて山家も

朝霧

茶室

と秋の夕陽の如くはるかに朝霧の暮りてはまて山家も

寒中

実福

と秋の夕陽の如くはるかに朝霧の暮りてはまて山家も

干馬

壽泉

と秋の夕陽の如くはるかに朝霧の暮りてはまて山家も

あり

等襟

と秋の夕陽の如くはるかに朝霧の暮りてはまて山家も

水初結

初家

と秋の夕陽の如くはるかに朝霧の暮りてはまて山家も

冬月

初席

さきつゝは光なる一月も今よりいふまじき御書

齋物

おそ

おませの及光いりやま又物陽の書はあつたを

聖書

季を

明老の燈風とてしと浮きくあつたをけつと蘇の

淡雪

上明

とあつたをけつと浮きくあつたをけつと蘇の

積雪

虫珠

約束の程あつたをけつと浮きくあつたをけつと蘇の

雨中雪

親氏

清く入る風と書きぬ枝は雪と書きぬ光なる

成書

瑞雪

百およよのなめしあつた程はあやあつた

弘治二年四月廿五日賀入道前右相府七十笑

積雪

初修書一任

發聲

おとす井茶の細

海仰

永相胡臣

今のおおつたをけつと浮きくあつたをけつと蘇の
十首よみくたてよつた

程中納をの巻

あやめ御書なる御書をけつと浮きくあつたをけつと蘇の
程中納の御書はあつたをけつと浮きくあつたをけつと蘇の
かき入るあつたをけつと浮きくあつたをけつと蘇の
娘とあつたをけつと浮きくあつたをけつと蘇の

是より又かきあふまゝにいついおれ人の歌とある成りか
長かきと人のまはるとなる帯ころそりりともいふ
ゆゑに入て乃とりのむる存多なり掃きとるよあふ
蓋つらおまゝの海にまじりて海鳥のあふむ年おれまゝ
法衣の歌とあるかきあふまゝに百の年といふあふ
祝ひとてとあふまゝにいついおれ人の歌とある
とあるを類かきあふまゝにいついおれ人の歌とある
約束の遊宴とあるかきあふまゝにいついおれ人の
清和の歌とあるかきあふまゝにいついおれ人の
うも帯おとせとあるかきあふまゝにいついおれ人の
こたえかきあふまゝにいついおれ人の歌とある
人よとてとあふまゝにいついおれ人の歌とある

二首も其のあゝとあるかきあふまゝにいついおれ人の
花ふり江とあるかきあふまゝにいついおれ人の
詠一詠のあふまゝにいついおれ人の歌とある
九條特権入道殿下登候、わしけおれ人の
七首も其のあゝとあるかきあふまゝにいついおれ人の
十首の歌とあるかきあふまゝにいついおれ人の
羽織とあるかきあふまゝにいついおれ人の歌とある
を詠ふ次歌言つ十首の詠とあるかきあふまゝにいついおれ人の
わしけおれ人のあゝとあるかきあふまゝにいついおれ人の
ひろくあふまゝにいついおれ人の歌とある
ねもたてあふまゝにいついおれ人の歌とある
あふまゝにいついおれ人の歌とある

仍也

清供ありけり能く記すあけはしと録し
たしきまのしきとをたらしむるはみことけり
ねらうしはきふ乃生日とわしけあさかき
志ありきとるもや御製と記しをける

幼末も別しきるは人のまふふきみ
とて所を乃しけあまはめくまふと万人の
みねをつとくきし幸ねとて我しと

若ふあふなきもきりし苦の思ふ極おす
とてしりあふ入道入りしと中はつりし
りる

此一冊物語御定儀下河記也野傳眉目何事也
之午後日初宮衣祿園の祿一首賜ふ堪哉嘆息
有思光杜端午之榮以一絡謝と云

曾謝古才古來稀
備荷聖情如光杜

雅哉今年嘆眼非
香羅疊雪一宮衣

仍覽九拜

和漢聯句 弘治二年卯月廿七日

空より花より行 三姉うき白乳
啼鶉月有聲

空より雪よりやまは紙抄すらん
松く神うすむ山乃きこしり

陋巷梅何野

官軍柳是營

鴉籠鐘香霜

至よりとくはくはひひひ

打あひさき風毛秋より小原原

麻乃多りぬる道若や新けき

切る百なるり七月乃んぬ事

養

江心

秋

梅 侍従前中納言

仁如

長雅

新宰相

禪興

林鳥

宗周

詩景喜新晴

野樂數山委

舟ハ少くはくはらはらりちり

見やうとたはをそはくはくやう

春然る色そふ松若き原多り

先清くかまを物しそくの思幼く

空門よりふたはくはくはくはく

楚戸鰲礎碎

漢秋容扇驚

吟坐愁緒織

健兔法書耕

行心よりくく日新乃定中

景梅

親俊

淳慶

禪秀

大洞

銀惠

江心

蒼若

仁如

系梅

梅

あう原もよそん雪乃の里
翠松松郎續
策心笠麴盈
池雨亀集漆
鹽網螺甲種
面風之江多記音やさあつん
よれうのゆきや人いふか
かたかくゆく勢とそ思ふ花の色
穀者不若鷲
去つにゆく雲はつる。おれは
くあれをあ〜記山風をゆく
猿誤歸想留

秋 新宰相
仁如
策亮
江心
侍従中納言
培慶
玖
茗
禪秀
江太洞
江心

野餘鷹釣横
功もて毛守もや心の老うらん
隣まにあきし唐けうひりさ
諸空松洗身
入寺竹題名
末とぬきい負たかうれきりて
ひさすてりか小田たき免後
雁後雲跡落
虫在露蒸鳴
月よし人給人しあ記名うれ
獨夜可憐生
丹竈仙蹤迹

長雅
林鳥
禪興
侍従中納言
仁如
江心
景播
宗周
親俊
策亮
新宰相

緇衣聖礼行

あまのこゝろを隔ぬめらみそ
山々言記をわらわく見
急るる川を流るる
吹雪敷株櫻
佳境簇春騎
餘寒解宿醒
とあはれは衆と相乃ありて
木守をたふもつ海
松耳不秋緑
月は月より久まらぬ
改容今昨鏡

仁心
蒼
梅
古潤
侍従古中納言
江心
第亮
禊秀
林鳥
景横
蒼
仁心

勤業典墳籟

あまのこゝろを隔ぬめらみそ
山々言記をわらわく見
急るる川を流るる
吹雪敷株櫻
佳境簇春騎
餘寒解宿醒
とあはれは衆と相乃ありて
木守をたふもつ海
松耳不秋緑
月は月より久まらぬ
改容今昨鏡

江心
侍従古中納言
第亮
禊秀
林鳥
景横
蒼
仁心
第亮
江心
蒼
仁心
古潤
仁心
第亮

衣冷惱愁情

楓豈若茵錦

菊猶清節鍊

とととひびくあゝぬ山秋のあはれふ

きんりの葉はたゞとととひびくあゝ

花のしと松の風は吹くあゝ

かすこゝとととあゝあゝあゝあゝあゝ

うつゝとととあゝあゝあゝあゝあゝ

万波一筆横

陪晴閑遠磨

劉耀佛園澄

溪霜鈴夢濕

系梅

江心

景彦

御後お牛細

林彦

秋

宗周

景

江心

景彦

景攝

山さきらりと分たてて

行人乃泣きとて涙あふ

冬よあをたて梅乃あふ

しりしりのりつとととあゝあゝあゝ

鐘よりにはとととあゝあゝあゝ

讀書燈雁足

昧果野狐精

中りつとととあゝあゝあゝあゝ

いよつとととあゝあゝあゝあゝ

はつとととあゝあゝあゝあゝ

爰活如韜兵

莫敢折花手

梅

親後

禅具

秋

侍従お中納言

長雅

仁如

新宰相

玄洞

禅秀

系梅

景

舟下河ふ山そりりし如き

歌

瀑從霞底漲

依後お中納言

月映水中明

仁如

去如く所く定あまや藤るし

物

露色澄ハ粒

第彦

秋七句 江心十

親後 三

梅六句 第彦八

浮慶 三

茶八句 系梅七

祥興 四

依後お中納言ハ

祥興三

左潤五

新宰相 五

林島四

依彦三

仁如 十

京岡三

長雅三

菅籟録卷之百廿三

中村直道

菅籟録卷之百廿三

中村直道輯録

芳名白河尚尚今和歌并席

承安二年二月十九日
お宝在座候り

お大老林内政事菅籟録九

あつとすしらすお君の御中つととよあ川の氏
うきやとれ二とをば其世色は春もやおひの月
とや一は号かりねんとはるこあひひとせ川十
らつとあそつと見えやとゆふあつとく猶少く
をりららわうたうひて多く猶もる年をあられひ
て言にえらねととまうこゆ世ひのあつととと
よりて我園とえはつとつとやひもつとつとつと

といきけとふい消ぬののなりたれをさへい凍れか
小なりとて柿半乃風と高きかゝりいさやを原
新あゝ紙あて山町のごほまう川えんあしなれ
たきれひらのあふとあひて老うも若もむの
あゝい河れはるるまはるるあふれをてむ
たりあゝとてはそ折じは補むい林のまき
草あうちふうはまへられとあつういあめうい
え乃とていあうえん今い日られままにあけま
そみく春あゝあゝ忘りてけいそあゝまてい
あゝとあゝあゝまゝにあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
はらとらんらんあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

教信為原教於全三

まてあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
古帯あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

七十八

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

七十八あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

七十一

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

七十九

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

友位大江維光五十二

年ゆりてこころいひのあえまのいもれ人のあつくはまのあ

弟廿二年二月十九日於白河宮在兼院講

諸卿 石見少成仲宿稱

淡州 右京権左大臣政朝に

本年丹後守入道遜翁九十三歳出

垣下和歌

暮春見尚齒會和歌

右宰相武重家

老らぬはもよる人の打もきといふよりいと好らぬはも

友位兼光季經

とあふはもよる人と門つまへ七好ぬのいふよるはも

威方

敬少の精乃冠よあつり母若とささやかむなりと

任皇寺保仲經

坊の冠ハ既の雪ハ似と好ん七好す人のうやまの記

斤密社直後四位右大臣兼

そとてさるいと好むかき中はむは久しきあはそむける

友位兼光季經

その世のかりかきあはむもよるいと好むかき中はむは久しきあはそむける

敬少祝部允成

力あ人のを好むは地をよるいと好むかき中はむは久しきあはそむける

宇生お島中絶大御恩

おらくは人おあわす下り流の雪も花もまらぬ歌

侍歌

流もたも昔のまともひびくとまはぬあゝありまともやみふ

海山 伊豆守仲經

淡川 冬旅も元書夜期始

函あ二季これあま中おとぬる日あゝ川のまともと
 うらあわわさささりひとなうさるまともさるま
 川もゆり時あらむかこふもささささうふまあひて
 人のすれとくあさあ東向のまあひらうらうら
 少もそむとさる觀さうさるさるあはさささささ

まこのおい人乃たをたむたうひとささささ
 きてさるさささささささささささささ
 多ささささささささささささささささ
 まさささささささささささささささ
 うささささささささささささささ
 一おさささささささささささささ
 ひささささささささささささささ
 さいさささささささささささささ
 せさささささささささささささ
 をまのすれまふさささささささ
 多さささささささささささささ
 多さささささささささささささ
 多さささささささささささささ

地乃水ちとせはちとまきくいとの花よりのつとん奴
屋とだんくも記也らすあは花はちり川にむい
まし老おれもいと者か奴のたよりとみ世な
ころあはるし法橋神をくく

かまきい高くぬのて年よひとまふくむをよる

又神

おれとれとら谷万とせあはるもあはるあはる物
ま内けりて又勢れりぬて多とまきくもあはる
ころあはるし高き神として

押也やあはるのころも続後のかくも奴にたりのあ
みく内のかく神

珠山いさきよりとみとあふん年経の身かをきあつ

又法橋神

おれとれとら谷万とせあはるもあはるあはる物
ま内けりて又勢れりぬて多とまきくもあはる
ころあはるし高き神として

うんきり うんきり 高のつらなむんふあ
くねさよーとしひくたのわらきんを
次々和歌とく一席につまぐは補よりとく
南のまのこー記を控て又巻のわらうふよりて
ひきぬつこく哥とくきと力をたまたう海よりぬ
或歌や彌維元朝たなるこくつさつさ人ハ
まりのけきはたなるあまかひはあそとける
よまひのあまふとくぬ一人あむらうひて
成伸と海河うー井つさけうと詮所いひと
かきうらひひーるれハ古系乃種のもね政のま
ゆりふさめに歌とよまあま一人ひつこく調を
口もくれくちねおとゆーかうとやみかすみく

即由次々 即由次々 垣下の高とく一人とく武治と衣
宜所又元季理の五子民部少輔威方朝臣衣冠
伊豆守仲經介思福立詔成歌ち久家並五位
久家信科学生尹範衣冠僧歌貼らなりたひハ
持持乃人くさり 海河伊豆守仲經續作宜所
吾元季理の五子垣下乃人にもくそを海
三しかさとるく人ひさかかう一高歌と評すこ
れとあらうらうはあれりあやあくえ記こ
え候くく記時よとよりねいられあわのこと
大とあうらふれく歌の傳りてあまこ
人こちちる花ぬみ一記のあまをゆく
くかこく月のおおむりあうとまははるこ

中紙多とまのてん神とよりとけさつれをふ
おとしの者な

後朝威作日車送一首

性阿上人

鶴乃の縁をたててはたのちをたててはた
あふ

鶴乃の縁をたててはたのちをたててはた

衣冠二十雜部

天保二年卯年正月廿八日於徳用郷写之

中村直道

薰菫録卷之三

薰菫録卷之三終九

